

昭和52年5月23日第3種郵便物認可 平成4年5月1日発行 毎月1回1日発行 通巻332号

かもしか

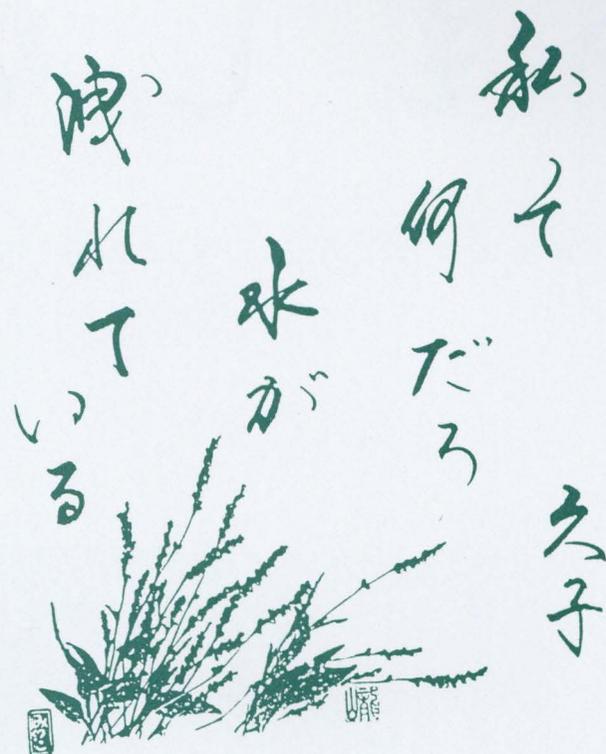
第10回川柳Z賞入賞作品特集



1992.5

No. 332

★第10回五十嵐さか江賞・加藤久子 書・立石龍山 押花・石川みつ子



五月号もくじ

第10回川柳乙賞特集

- 大賞 加藤 久子 一
- 選評 杉野 草兵 二
- 選評 大野 風柳 三
- 選評 吉田 健治 四
- 選評 片柳 哲郎 五
- 選評 橋高 薫風 六



加藤 久子

- 選評 森中恵美子 一七
- 選評 寺尾 俊平 一八
- 選評 田口 麦彦 一九
- 選評 尾藤 三柳 二〇
- かもしか集(257) 二八
- かかしのたわ言 表三
- 表紙絵(6)鯛島 菊池 時男
- カット(64) 太田 正末

第十回川柳乙賞・大賞

(賞金 十万円・句集・津軽塗特製楯)

岩沼市 加藤 久子

ごろんと角材寒い日を跨ぐ
 着い木になろうとして汗ばむ夜
 貝割れの根っこぞろりと金環蝕
 日向臭い猫と待ってるオートバイ
 街炎えて鳥の食事は透明に
 醤油壘とつぶり暮れている素盞足
 ぼらの首量の上の等高線
 夕方の両手の零れそうな他人
 石の吐息にまみれてしまふ白い船
 バスも私も消える肉屋の鏡
 百日均一首を並べている薄日
 FAX番号するずると熱もつ街
 皿も私も斜めに積まれ傾く月
 記号と論冬の臓器は鮮かに
 ゆらゆらと硝子屋が来るビルの沖

銅像は曳かれ卵の薄い闇
 月揺れて不意に疑う指の数
 晩秋の沼張りつめるひとりの重さ
 花を掃く鈍痛がある凍死体
 また猫と誤れて暗い水路かな
 体温を喪くしつづける夜の果実
 私って何だろ水が洩れている
 四〇三号冬の水槽夕焼ける
 帆船は小さく輝き楫田の羊
 真昼の湿原人形の指ひとの指
 いっぱいの陽射し人狩る意満ちて
 水底の断層写真遠い真昼
 のつべらぼうの猿回し来る街の風
 象は冬で眼底のあたたかい泥
 飛行船揺れて出てゆく部屋の暗がり

- 選考のあとに
- 大賞 11 加藤 久子(宮城)
- 準賞 10 佐藤 岳俊(岩手)
- 準賞 10 渡辺 和尾(愛知)
- 準賞 10 樋口 由紀子(兵庫)
- 秀逸 9 吉田 浪(岡山)
- 秀逸 9 芳賀 弥市(宮城)
- 秀逸 9 山根 素蛙(岡山)
- 佳作 8 玉木 柳子(福島)
- 佳作 8 荻原 久美子(東京)
- 佳作 8 坂東 乃理子(兵庫)
- 佳作 7 梅崎 流青(福岡)
- 佳作 7 西秋 忠兵衛(千葉)
- 佳作 6 小林 こうこ(静岡)
- 佳作 6 後藤 正子(福島)
- 佳作 5 榑崎 充代(兵庫)
- 佳作 5 辻村 みつ子(岡山)
- 佳作 5 岩崎 眞里子(青森)
- 佳作 5 榑崎 進弘(兵庫)
- 佳作 5 樋口 仁(三重)
- 佳作 4 神谷 三八郎(愛知)
- 佳作 4 吉田 柳(山形)
- 佳作 4 情野 千里(兵庫)
- 佳作 4 上島 みる子(京都)

第十回川柳Z賞・準賞

(賞金 一万円)

胆沢町 佐藤 岳 俊

凍み大根ゆっくり囃んで春を待つ
 鬼一匹くらい胃壁を歩いている
 農婦の死の闇にオリオンだけ光り
 こがらしの夜孕みだす雪おんな
 議事堂も逆さ休田哭いている
 いくたびの弾圧に耐え泥田螺
 眠りきる年輪を裂く冬の斧
 雪おろし熱ばかり帯び尾骸骨
 冬囲い葉によろずの神ばかり
 農政の死角にひらく稲の花
 泣く孤児へ祖国の墓は黙っている
 血の色だ休耕田の草が枯れ
 ピカピカの農機で男つぶされる
 枝肉にされる子牛の瞳をみつめ
 泡を吐く田螺の祖父母眠っている

流木の遺骸で仏像などづくり
 一枝を信じみの虫交を越す
 大嘗祭へまっすぐ投げる米つぶて
 豊満な思想を抱いて雪の下
 火を吐いた土偶の破片掘っている
 飢えた胃にゆっくり積るぼたん雪
 墓塚に鎌ばかり刺す米輸入
 冬の葬泣いて凍土をほりおこす
 この石も鏝になれる顔がある
 頬かぶり北のユーモア地にあふれ
 農耕神ぞろぞろ根雪あるいている
 寒の朝一羽のすずめが飛んでくる
 屋根おちる雪ひとつづつ春の声
 屈葬のまま眠りきる雪の夜
 雪乱舞けものみちの果てに家

- 佳作 小野 多加延 (兵庫)
- 佳作 稲垣 冬眠 (新潟)
- 佳作 吉田 花 (青森)
- 佳作 広瀬 ちえみ (宮城)
- 佳作 桐越 千絵 (北海道)
- 佳作 倉本 朝世 (大阪)
- 佳作 菊地 俊太郎 (東京)
- 佳作 山本 忠次郎 (東京)
- 佳作 普川 素床 (千葉)
- 佳作 高橋 佐知子 (東京)
- 佳作 板東 弘子 (香川)
- 佳作 松永 千秋 (福岡)
- 佳作 大谷 晋一郎 (香川)
- 佳作 山本 乱 (福岡)
- 佳作 峯 裕見子 (滋賀)
- 佳作 徳永 政二 (滋賀)
- 佳作 万 迷多 (岩手)
- 佳作 大橋 政良 (北海道)
- 佳作 伊東 マコ (山形)
- 佳作 稲葉 早恵子 (兵庫)
- 佳作 柿木 英一 (大阪)
- 佳作 高橋 かづき (兵庫)
- 佳作 奥山 晴生 (京都)
- 佳作 柴崎 昭雄 (青森)

第十回川柳Z賞・準賞

(賞金 一万円)

東浦町 渡辺 和 尾

まぼろしの坂を描いて倒れむと
 黄蝶舞い それ掴まんと短き掌
 透明なみずうみいまも瞳のなか
 電話続き脳裏はらはら侵食され
 切り株の一つに座る胸より斜光
 北を見て菌痒きものに雪たるま
 古書街で疲勞激しくきみは散乱
 迷うべきか迷わぬべきか扉に紅
 眉あげよ しかるに敗れ戦また
 遠退いてゆく夕焼けも慰めなり
 霧深く霧の向こうはすべて忘却
 噴水を見つめて日暮れどき遊ぶ
 冬風やきみより温きものはなし
 野仏に野ぼとけを副え枯野ゆく
 一枚をあぶり絵にして迷い多し

竹林で腹を刺されてそれは痛快
 闇を愛して昨夜も泣いた男と女
 絶叫や 自由の果てを垣間見し
 夢多くて俯せの死を選ぶことも
 沈黙や 笑顔を信じさらに沈黙
 もどかしく敷石続く街は保守的
 春なれば生命を流しとおせるか
 禁断の水飲み終えてそれ以後風
 頬染めて未来語れよぼくの重心
 きょうのこと白い筆記具折れた
 転がった勇氣を拾え雪降り積む
 盗人を許せばあたり菜の花満開
 カレンダー僕の手先の鋭い時間
 匂い激しく霧の彼方を注目せよ
 一人から二人に耳を詰められた

- 佳作 加賀屋 美津子 (秋田)
- 佳作 山本 磔 (京都)
- 佳作 本多 洋子 (大阪)
- 佳作 立原 みさと (高知)
- 佳作 奥田 一星 (宮城)
- 佳作 佐藤 美文 (埼玉)
- 佳作 岡崎 徹平 (京都)
- 佳作 松田 京美 (熊本)
- 佳作 板井 真知子 (大分)
- 佳作 網野 悦香 (北海道)
- 佳作 吉田 三千子 (愛知)
- 佳作 神平 狂虎 (和歌山)
- 佳作 加藤 かずこ (北海道)
- 佳作 加藤 正治 (愛知)
- 佳作 竹内 寿美子 (島根)
- 佳作 高田 政旗 (北海道)
- 佳作 唯野 奈保美 (広島)
- 佳作 板橋 映水 (宮城)
- 佳作 西尾 典祐 (愛知)
- 佳作 宮本 めぐみ (宮城)
- 佳作 川路 泰山 (静岡)
- 佳作 長井 すみ子 (福岡)
- 佳作 辻 スミ (和歌山)
- 佳作 末村 道子 (熊本)

第十回川柳Z賞・準賞

(賞金 一万円)

姫路市 樋口 由紀子

満開の桜をさらに追いはらう
 月明のたびに近づくと非常口
 沈黙は赤児の指を嘗めてから
 乳母車を胸の上まで引き上げる
 右岸ではきちんととめる六個の釘
 針葉樹から父が離れていく月夜
 肉体の内へ内へとらくがきする
 手首は今も想像妊娠くり返す
 恋情を言ってしまう秋の景
 両耳がさらわれそで立ち上がる
 花柄の布を絞って自然消滅
 粘性の波と抱き合う わが童話
 透明な瓶になるまで谷を這う
 順番があつて指紋は拭き取られ
 少年の指を数えた痕があり

底へ底へと植物反応する手紙
 めいぐるみは母に預けたままの雷
 鳥の群れ わたしを通り過ぎていく
 有蹄類の獣近づくと白い画布
 指切りを西から風が吹くたびに
 未体験ゾーンで魚と浮き上がる
 おとこいからの稚児行列をきれいに剥がす
 引き潮にナイフを入れていこうとす
 抱擁の先まで渡る黒揚羽
 不意に突き出す洗面所の鏡
 オーガングジのブラウスを着る解放区
 姉の指 無数の円を描くなかれ
 八月の臨時列車は耳から消える
 赤い紐の劣性遺伝つづくなり
 遙か昔 星はぶつかり そして冬

- 杉野草兵選
- ・特選 加藤久子(岩沼)
 - ・秀逸① 梅崎流青(柳川)
 - ・秀逸② 樋口由紀子(姫路)
 - ・秀逸③ 玉木柳子(郡山)
 - ・佳作① 荻原久美子(東京)
 - ・佳作② 吉田浪(岡山)
 - ・佳作③ 桐越千絵(広島町)
 - ・佳作④ 立原みさと(土佐)
 - ・佳作⑤ 岩崎眞里子(黒石)
 - ・佳作⑥ 佐藤岳俊(胆沢)
 - ・佳作⑦ 西秋忠兵衛(千葉)
 - ・佳作⑧ 吉田州花(青森)
 - ・佳作⑨ 唯野奈保美(広島)
 - ・佳作⑩ 上島みゑ子(京都)
 - ・佳作⑪ 川路泰山(金山)
 - ・佳作⑫ 山根素蛙(岡山)
- 大野風柳選

- ・特選 榑崎充代(神戸)
- ・秀逸① 坂東乃理子(加古川)
- ・秀逸② 稲垣冬民(新潟)
- ・秀逸③ 山根素蛙(岡山)

秀逸 岡山市 吉田 浪

おきふしのはずれの仄かなるさくら
 さくららはりはらり ちっぼけないのち
 風が来て風去るまでの夢語り
 じょうじょうとことんで汚れてゆく螢
 甜言に逃げおくれつつ戯れつ
 壺を抱けばあばらに淡きばらひろがる
 野やきさらすこしあからむ秋の耳
 落花落日 草の褥や草枕
 枕辺にきのうの花が降り積もる

しおしおときのうがきょうに移行せり
 夕野へに草矢を放つ狂女いて
 竹笛のやや曇りゆく受粉以後
 半身は芒と揺るる岸づたい
 月光と繋がり はじむ弥生土器
 くちづけや 露まんだらの露吸わむ
 秋群青 埴輪半身吸われけり
 いちまいの闇を埴輪の舟下る
 乳房から沈むはずきの瑠璃菩薩

秀逸 仙台市 芳賀 弥市

腹の立つことへ腹立て雪催い
 廊下の隅にコメと魚が立たされる
 何の証の背中に残るいくさ疵
 砲身がぐにやりと曲がる漫画かな
 後ろから押すな地獄が見えるから
 行く末や墓の頭の鳥の糞
 墓の下の男の青いのどぼとけ
 明るい話をしようじゃないかコンパニオン
 魚屋の魚は僕より明るいか

今朝ほどの旗を揚げよう別れ霜
 後妻が来てゴキブリはみなごろし
 妻と似た匂いと旅ですれ違つ
 人間と疎遠になりし葱の土
 すらすらと温い言葉が出るキムチ
 近づけば火の匂いなる青すすき
 友達は何処にもいない木の墓碑
 風ぐるま千本ほどの闇供養
 秋が好きで零して歩く私の火

吉田健治選

- ・特選 玉木柳子(郡山)
- ・秀逸① 岩崎眞里子(黒石)
- ・秀逸② 荻原久美子(東京)
- ・秀逸③ 榑崎進弘(神戸)
- ・佳作① 渡辺和尾(東浦)
- ・佳作② 吉田州花(青森)
- ・佳作③ 樋口由紀子(姫路)
- ・佳作④ 普川素床(市川)
- ・佳作⑤ 佐藤美文(大宮)

秀逸

臆面もなく証人の足を拭く
空しくはないか評論家のカフス
捨駒に座右の銘が多すぎる
瓢箪の棚の向うは従社会
すこしへこんだ帽子に溜る星の屑
記号化を拒む一粒つつの飯
蕨人形を打ってむやみに飯を食う
ケトル鳴り止まず三島由紀夫の忌
信管を残り少い歯に埋める

勝央町 山根素蛙

もひとつのエリアで泣いた父の馬鹿
枕木が等間隔に寝てむなし
パレットにひよつくり戻る放浪者
喝采が終って借りた傘を干す
けだるい午後がいっぱい溜る瓶の底
フラスコの中から鬱を助け出す
みせかけの優しさで割る生卵
巻末で青い広場が待っている
不条理を探りに裏表紙からめくる

佳作 郡山市 玉木 柳子

にんげんに汚れて風は野に還る
妻の掌に還るしかないブーメラン
軍歌しか知らない慕の群れがある
男の眼動くと匂ういくさの炎
千羽目の鶴が喪服を着て飛べぬ
自殺少女の掌に光ってた草ばたる
ヌード写真の女は指先から濁く
音のない手話から響いてくる春た
どうしても笑わぬ石が掌に残る

佳作 中野区 荻原久美子

さみしさを洗ふさみしき藤の花
藤棚の向かうは谷川かと思ふ
まなうらの風は海より葬の列
通夜人の帯解くごとく緋の牡丹
契りきて戦火さなかの白萩は
逢ふことの蜜の冥さを思ひをり
一睡やたましひ驚る遊びして
生贄の山羊をマノンと申すべく
愛染の闇そこにある白牡丹

佳作 加古川市 坂東乃理子

魔女ごっこ魔女の気分になつてくる
眼には眼を呪詛には呪詛を立ち上がる
祭りの太鼓ひびいてわたくしの鼓動
背中押すたびにのけぞる少年よ
ゴキブリも深夜労働なのですね
目覚めるたびに私縮んでゆくような
きつい下着とつるさい男 少し嫌
見えそつで見えない浴室の小窓
ペンギンが飛び込みそつで飛び込まぬ

佳作 千葉市 西秋忠兵衛

憲法の某に八月の喪章
半世紀 ドームは八月のかたち
銃声がきつと出てくるオルゴール
夕闇にゆれるフセインのブランコ
国籍不明の弾痕があるラクダ
レーニンの背中を撫でる古本屋
左脳に残る古ビルのある風景
クレムリン広場は昏れる 一輪車
コシヒカリの田んぼに眉が立っている

佳作 柳川市 梅崎 流青

キリストの音で倒れる冬の蟻螂
林檎サクと噛む美しき嘘の後
焚火跡人の手足が燃え残る
風花や母に告げてはならぬこと
鋭角な言葉で割れる冬のメロン
腰手拭いの温さに騙されぬように
ざぶざぶと私を洗つ月の河
遠吠えに呼応するのは父の喉
愛咬や柳はなにをしたたらず

佳作 静岡市 小林こうこ

深く腰掛けてことわれない話
大根をみじん切りする迷いかな
肝心なところでものが言えてない
お辞儀もボールペンも出にくくなった
もの言えは括弧括弧でくくられる
拗われそうな足へピンクのリボン
起爆剤のどのあたりで湿気てしまっ
女だと思われてない節がある
骨っぽい私マリネに漬けておく

- 佳作⑥ 桐越千絵 (広島町)
- 佳作⑦ 情野千里 (姫路)
- 佳作⑧ 菊地俊太郎 (東京)
- 佳作⑨ 高田政旗 (札幌)
- 佳作⑩ 樋口仁 (四日市)
- 佳作⑪ 山本忠次郎 (東京)
- 佳作⑫ 上島みどり (京都)

片柳哲郎選

- ・特選 吉田浪 (岡山)
- ・秀逸① 荻原久美子 (東京)
- ・秀逸② 渡辺和尾 (東浦)
- 秀逸③ 樋口由紀子 (姫路)
- ・佳作① 柿木英一 (大東)
- 佳作② 岩崎眞里子 (黒石)
- 佳作③ 広瀬ちえみ (仙台)
- 佳作④ 板東弘子 (国分寺)
- 佳作⑤ 情野千里 (姫路)
- 佳作⑥ 松永千秋 (大木)
- 佳作⑦ 大谷晋一郎 (高松)
- 佳作⑧ 吉田三千子 (名古屋)
- 佳作⑨ 神平狂虎 (和歌山)
- 佳作⑩ 倉本朝世 (大阪)
- 佳作⑪ 加藤久子 (岩沼)

佳作⑫ 長井すみ子 (福岡)

橘高薫風選

- ・特選 後藤正子 (和歌山)
- ・秀逸① 佐藤岳俊 (胆沢)
- 秀逸② 坂東乃理子 (加古川)
- 秀逸③ 梅崎流青 (柳川)
- ・佳作① 大橋政良 (砂川)
- 佳作② 高橋かづき (西宮)
- 佳作③ 荻原久美子 (東京)
- 佳作④ 広瀬ちえみ (仙台)
- 佳作⑤ 奥田一星 (気仙沼)
- 佳作⑥ 西秋忠兵衛 (千葉)
- 佳作⑦ 小林こうこ (静岡)
- 佳作⑧ 峯裕見子 (大津)
- 佳作⑨ 竹内寿美子 (松江)
- 佳作⑩ 板橋映水 (仙台)

森中恵美子選

- ・特選 芳賀弥市 (仙台)
- ・秀逸① 小野多加延 (姫路)
- 秀逸② 西秋忠兵衛 (千葉)
- 秀逸③ 樋口仁 (四日市)
- 佳作① 榑崎進弘 (神戸)

佳作 福島市 後藤 正子

爪立ちは続く喪明けの束ね髪
ごまめにも劣る奥歯は病んでいる
親はもう方程式に解かれてる
一呼吸置いた拳が愛おしい
吃水線どっぷり父の舟で寝る
風下の泣かない石を拾ってる
羨望の尻尾押える義歯がなる
訴状など下げぬ父の樹一直線
かたつむり手話を覚えてから弾む

佳作 神戸市 檜崎 充代

紫陽花の首のあたりに家族愛
美しい景色のようにすれ違っ
私の行きたい方へ曲る道
男には男の弱さ滝の音
炎唇に歩み入る時麒麟の死
うっすらと闇が溜まっていく筆筒
ふり返る牛一頭の重さにて
伐採が終った山をじっと見る
向日葵や親代々の離婚癖

佳作 邑久町 辻村みつ子

サングラスはずし脱却試みる
友は旅私眼科の暗室に
眼圧正常トネル抜ける日も近い
砂人形目からサラサラ砂になる
痛みにも嘘にも慣れていい日和
流れ星われも瞬時に消ゆるなら
星になれたらきつと見つけて下さいね
顛顛を滅多打つのは沖鳴りか
棧橋よ静かに朽ちる月見草

佳作 黒石市 岩崎真里子

風の貌 風のリズムで わたしは春
春を行く人のかたちの花記
風に佇つ子の背が光る朝の実感
ふれないでください 蒼い箱つぶやく
十五歳 刃は緑る 夏の恋
アイロンをかける雲になる涙
髪焼いて四十の扉開け放つ
強すぎる私を抱いて空はむらさき
りんどうにつに負けたと泣いた秋の空

佳作 神戸市 檜崎 進弘

窓をあけて山のかたちを確かめる
風景の中でわたしの子が育つ
塩鮭の骨ひき刺す住えかな
迷子札 船渠の船を見て帰る
子は眠る夜の帆船夜の水槽
如月の父に鱗の無かりけり
晝寤売場の棚に疲れた顔を置く
手にとってみれば涙のごときもの
病床にあれば半島の形している

佳作 名古屋市中区 神谷三八朗

遺臣ひとり城門の釘打っている
妖怪なり敷の小怪すうとうと雪
蘭語で攻めてみるか川上のおんな
本葬に立ち入合う足袋が乾かない
傷口そのまま旅を重ねて 旅
憎悪一途に終日薬を打つ
やまぬ耳鳴りいくさばかりの朝刊
終章の揺っても鳴らぬ骨壺
恋百話マッシュマロ皿に盛られている

佳作 四日市市 樋口 仁

下駄箱をあければ父の戦闘機
極太の結婚線を出られない
神がいるはずです電話番号簿
古い港を今も覚えてるポスト
平凡を離陸するなら風の日に
篝火が消えてしまった父の部屋
風呂場では魚の仮面を被るなり
残り火を燃やしてパンを焼いている
十砂降りの日に手紙などよこすなよ

佳作 山形市 吉田 柳

追伸で言いたい事をやっと思き
花吹雪われも景色もなきたおせ
怖い夢見たさ両手を胸に置く
大人よと言いつける若さうらやまし
人恋つる心閉ざして箱の中
さすらえる人の心で空を見る
新しい痛みが傷を忘れさす
一步一步引くつもりが半歩前にいる
人恋いやまとわりついて別れ下手

- 佳作② 柴崎 昭雄 (野辺地)
- 佳作③ 山根 素蛙 (勝央)
- 佳作④ 倉本 朝世 (大阪)
- 佳作⑤ 梅崎 流青 (柳川)
- 佳作⑥ 高橋 佐知子 (東京)
- 佳作⑦ 山本 乱 (大牟田)
- 佳作⑧ 吉田 柳 (山形)
- 佳作⑨ 菊地 俊太郎 (東京)
- 佳作⑩ 上島 みゑ子 (京都)
- 佳作⑪ 宮本 めぐみ (仙台)
- 佳作⑫ 徳永 政二 (守山)

寺尾 俊平 選

- ・特選 辻村みつ子 (邑久)
- 秀逸① 佐藤 岳俊 (胆沢)
- 秀逸② 吉田 浪 (岡山)
- 秀逸③ 渡辺 和尾 (東浦)
- 佳作① 万 迷多 (宮古)
- 佳作② 情野 千里 (姫路)
- 佳作③ 坂東 乃理子 (加古川)
- 佳作④ 樋口 仁 (四日市)
- 佳作⑤ 樋口 由紀子 (姫路)
- 佳作⑥ 山根 素蛙 (勝央)
- 佳作⑦ 板東 弘子 (国分寺)

- 佳作⑧ 松永 千秋 (大木)
- 佳作⑨ 後藤 正子 (和歌山)
- 佳作⑩ 山本 忠次郎 (東京)

田口 麦彦 選

- ・特選 小林 こつこ (静岡)
- 秀逸① 佐藤 岳俊 (胆沢)
- 秀逸② 渡辺 和尾 (東浦)
- 秀逸③ 吉田 柳 (山形)
- 佳作① 稲葉 早恵子 (神戸)
- 佳作② 樋口 由紀子 (姫路)
- 佳作③ 加賀屋 美津子 (秋田)
- 佳作④ 高橋 佐知子 (東京)
- 佳作⑤ 倉本 朝世 (大阪)
- 佳作⑥ 松田 京美 (熊本)
- 佳作⑦ 板井 真知子 (白杵)
- 佳作⑧ 吉田 州花 (青森)
- 佳作⑨ 網野 悦香 (釧路)
- 佳作⑩ 西尾 典祐 (名古屋)
- 佳作⑪ 坂東 乃理子 (加古川)
- 佳作⑫ 末村 道子 (熊本)
- 佳作⑬ 尾藤 三柳 選

佳作 姫路市 情野 千里

落下する椿追い抜く真っさかさま
下駄の音近づくあれは瘦せた神
指先ひとつで舞姫になる木偶になる
箱開く産みの母なら叱らない
あやまちをばくばく食べる孕み猫
月光菩薩を舞わせて寒い背のくぼみ
髪をほどいてゆこう森は祝祭
魚になったおとこを落とす焙煎炉
出産率で縛ろうつし世の鯨

佳作 京都市 上島みゑ子

冬の屋根静かなわけが置いてある
トンネルをいくつも越える逆縁か
れんげ一面廃線におく遺言状
死のはなし春のスーツを買うはなし
阿弥陀様の笑顔いたたく胸のあたり
天声人語に斬られて生きるあと少し
須弥壇の裏で眼ぐすりさしている
度忘れの数だけ老の坂にあう
アイロン台も賽の河原も責めてくる

佳作 姫路市 小野多加延

月見草いちどに開くオルゴール
いもつとの鳴咽がつづく川の霧
空いっぱい蜻蛉集る死の季節
夕焼けの海が見たくて墓地を買う
町工場のサイレンが鳴る誕生日
人形は俯せのまま川下る
指さきの孤独に馴れる枇杷の種
サーカスの天幕たたむ恋のあと
わが窓に今はじまるよ蜘蛛のサーカス

佳作 新潟市 稲垣 冬民

闇汁に入れたわたくし浮いている
神さまの物いいとなる雨・雨・雨
戸を閉てよやましい話するからに
夏に生まれ夏に死んだ子きつね雨
そしてみんな亡びるんだよ天邪鬼
生んだ親生んだ子声もなく歩む
こだわりを描きつずける含羞か
びじよ濡れの声おさな子を愛すべし
日葉ほとりまた白鳥に見られたよ

佳作 青森市 吉田 州花

月が出るから乾かぬ慕情などありぬ
水の乱わが陽性のかくれもなし
密約の小石ひとつと流される
ほのあまき陥穽に飼うは螢か
空になったようです私の薬瓶
帰りたい風が切り絵を抜けてゆく
食べ尽くす蓮華の果ての相克か
切れにくくなった私の持つナイフ
花散らす溺れた海の広さほど

佳作 広島町 桐越 千絵

絵葉書に水の音して眠られぬ
火の匂う鏡の中を歩いている
猛吹雪傘いっぽんを楯にして
雪しんしん他人の爪のやわらかき
某日は胸の野原に赤い雪降り
眼の中にひろがる雪野絵本買う
言葉生む古い帽子を捨てきれぬ
わが影がぽつんと坐る始発駅
紙と鉛筆おまえ何処まで逃げられる

佳作 仙台市 広瀬ちえみ

真っ青な危ない空があるばかり
土煙あげて向かって来るものは
楽しかった半券だけが残される
淋しい指に淋しい指が絡まるよ
生きるのに邪魔なでっぱりだと思っ
失うために走っているのかもしれぬ
すぐごと匂う差しに戻るなり
摺鉢の中で毀れてゆくわたし
笑い声 致死量が量られている

佳作 大阪市 倉本 朝世

人妻として横たわる秋の底
条件を満たせぬ花のまま並ぶ
火薬湿ってたちまちかすむ地平線
地球の扉が視えぬアリスはもう大人
まほろばの手前でいつも蹴躓く
机上のたまごひとつずつ割る脱少女
こころ難民寒い寒いと街へ出る
様式を変えても消えぬ蒙古斑
並び寝てそれぞれの沖見つめおり

佳作 文京区 菊地俊太郎

今日までのぼくを忘れる物工場
首の付け根の切り取り線がぼやけてくる
廃車から拾い出されて来た笹だ
折畳の道に散らばるにぎりめし
使わないピアノに鳥の足跡が
眼のすわった妊婦が道のまん中に
尾行者とわたしの影がひとつになった
退屈を救ってくれた停電だ
うしろから前からゴッホの足音

佳作 目黒区 山本忠次郎

バブロフの犬が咬みつく神の指
尻尾を水に浸けたまま嘘をつく
いとなみや僕のくせ毛は直らない
ふしだらな猫きびきびとバラの門
猿の目がくっついてくる淋しい日
前略今日も地獄は晴れてます
善人らしくうつる怪しい真水
死んでいく怪物の眼が嘘っぽい
光らない蛍に盗み聞きされる

- ・特選 加藤 久子(岩沼)
- ・秀逸① 芳賀 弥市(仙台)
- ・秀逸② 山根 素蛙(勝央)
- ・秀逸③ 神谷 三八朗(名古屋)
- ・佳作① 情野 千里(姫路)
- ・佳作② 普川 素床(市川)
- ・佳作③ 広瀬 ちえみ(仙台)
- ・佳作④ 本多 洋子(松原)
- ・佳作⑤ 菊池 俊太郎(東京)
- ・佳作⑥ 山本 忠次郎(東京)
- ・佳作⑦ 榑崎 進弘(神戸)
- ・佳作⑧ 西秋 忠兵衛(千葉)
- ・佳作⑨ 加藤 かずこ(札幌)
- ・佳作⑩ 加藤 正治(高浜)
- ・佳作⑪ 徳永 政二(守山)

・今野元白さんが都合により選考委員を辞退されましたので、九名の方々に選考していただきました。
・事務局を十回十年担当して参りましたが、次回から新事務局に替りますのでよろしくお願いを申し上げます。
ありがとうございました。 寄生末

選 後 に

屈折が欲しい、翔んで欲しい

杉 野 草 兵

第一次選で52編。二次選に40人。退職をして選をするには充分な時間がある。それがかえって迷いを深くしたように思う。30句の中につまらないのが一句、30句にすばらしい、捨て難い一句。それと、新人を発掘したい気持ちが生じる。

特選「加藤久子作品」屈折の切れがいい。遠近法により、無関係に見える句語と句語がコントラスト、トーンを新生させている。この作家よりうまい人は数名いるとは思う。が、ひたむきな姿勢に打たれた。

ごろんと角材寒い日を跨ぐ
日向臭い猫と待つてるオートバイ
醬油壘とつぷり暮れている素足
バスも私も消える肉屋の鏡
FAX番号するすると熱もつ街
体温を喪くしつづける夜の果実
私って何だろ水が洩れている
水底の断層写真遠い真昼

一句一句、この作家からしみ出たものであり、人を焼いた、さっぱりとした匂いが、充ち充ちているように思う。

「秀逸作品」切れ味はそれほどは思われない。が、それぞれの持つ、互いにまねの出来ない感性に引かれた。

「梅崎流青作品」今のまんまの姿勢で作句してゆけば、そのまま伸びて行く作家だと思

う。
ざぶざぶと私を洗う月の河
ひとひとり殺めるごとく卵割る
ひとひとりの葉裏に遊ばせよ
月光は桐の葉裏に遊ばせよ

「樋口由紀子作品」素晴らしい、目をもっておられる。やや多作して更に磨いて欲しい。沈黙は赤児の指を嘗めてから
肉体の内へ内へとらくがきする
両耳がさらわれそうで立ち上がる

「玉木柳子作品」饒舌な句が散見されるが、シャープな作風群に強く引かれた。

作品は自然体であれ

大 野 風 柳

毎年三月はこのZ賞作品の審査がやって来る。正直言って大変な時間を費やす。

そして毎年考えさせられる。このZ賞表彰の目的は何だろうか。つまり、芥川賞や直木賞のように新人対象なのか、中堅作家対象なのか、或いはベテランも加えて、作品としての表彰なのか。

何れにしても選者が、作家を知っているか否かによって審査基準が違ってくると思う。その辺のところをもっと少しはつきりさせて貰いたいものである。

そんな思いのなかで今年は樋崎充代作品を特選に推した。思い切りのよい表現、それは新鮮であり、実に若々しいのだ。力みのない自然体が良かった。

- ・ ぶり返る牛一頭の重さにて
- ・ 男の子ばかりで積み木横んでいる
- ・ 青年の背中が並ぶ水呑み場
- ・ ウサギ抱いてウサギのにおい移りけり

- ・ 銀杏が無数に落ちていく 歩く
- ・ 紫陽花の首のあたりに家族愛
- などなどである。

そして、フツと思った。もしも十句で勝負であったら特選にはならなかったであろう。三十句だから心地よく作者の気持が伝わって来たのではないかと。三十句一組にふさわしい作風とも言える。と言うことは募集句数も結果に大きな影響があるということだ。

- ・ 秀逸①にあえて坂東乃里子を挙げた。何よりも好感が持てたからである。
- ・ 風船をもらってからの気苦労よ
- ・ きつい下着とうるさい男 少し嫌
- ・ 見えない場所で徐々に腐ってゆくりんご
- などが良かった。

- ・ 秀逸②の稲垣冬民 ③の山根素蛙はそれぞれ自分の句境をキッチリ持っている。安心して鑑賞ができる。
- ・ スペースの関係で詳しく書けないので、作

どうしても笑わぬ石掌に残る
生年月日だけを残して消えた川
人さし指の先から冬がやってくる

「萩原久美子作品」目を見張る作風群のトップに「さみしさを洗ふさみしさを藤の花」何故この作品を配したのだろうか。次回ご配慮を。最後まで僕を悩ませて、膝に残っていた応募作品の作家名を列挙して感謝致します。

- 佐藤 幸子・柴崎 昭雄・井上 信子
- 岡崎 徹平・三鍋ゆうこ・柿木 英一
- 樋口 仁・市川つとむ・宗村 政巳
- 山本 乱・板東 弘子・大窪 純子
- 徳永 政一・峰 裕見子・松田 京美
- 普川 素床・松本 百子・朝倉 福
- 勝野みちお・宮本めぐみ・田代 時子
- 佐藤 美文・松村 育子・万 迷多

【お礼とお願ひ】お陰様で、このZ賞が満10歳になりました。育てて頂いた応募の方々、都台で辞退された方々を含めた、選者の皆様、に厚くお礼申し上げます。また、高田寄生木夫妻の事務局にもZ氏に代わり感謝申し上げます。②11回目からまた、皆様のご指導やご助言を得まして、続けて参りたいと思ひます。どうぞ宜しくお願ひ申し上げます。

- ・ 虫頭だけを次に示して作者に敬意を表したい。
- ・ 墓石ばかり鎮まれしすまれ日本海 冬 民
- ・ 空しくはないか評論家のカフス 素 蛙
- ・ 何だ何だと寄って来るのは風ばかり マユ
- ・ 姉の脚より少し細くて罪を負う 晴 生
- ・ 書斎にいたる 造花になってしまったか 磔
- ・ 肉体の内へ内へとらくがきする 由紀子
- ・ ジーンズの裾たちよ散りいそぐなよ 徹平
- ・ 猿は桃太郎をなぐるだろ きつと 忠兵衛
- ・ 本葬に立ち合う足袋が乾かない 三八朗
- ・ 「地球は着し」上樹の下は冬誰も冬 晋一郎
- ・ 速達で来たのは俄雨だった 乱
- ・ 行く末や墓の頭の鳥の糞 弥 市
- ・ 紙と鉛筆おまえ何処まで逃げられる 千総
- ・ 水飲んで自白すること何もなし スミ
- ・ 松茸の匂うあたりの生と死か みゑ子
- ・ ぶり返る轍の長さ風の長さ 政 良
- ・ 葬儀屋が舐めた鉛筆置き忘れ 正 治
- ・ 誰よりも低いところで折っている 千 秋
- ・ 哀しくていつも後記を書いて来た 迷 多
- ・ 皆帰ってから笑うローソク立て 二 郎
- ・ 正解は一つ西瓜の種子黒し 美 文
- ・ 逃亡記橋の名前はしるされず 智 慧
- ・ サン格拉斯大人のいないいないばあ 美津子

初めての選を了えて

吉田 健治

先ず、光栄ある Z 賞の選者に選んで頂いたこと、心から感謝致します。

昨年、選者にとのご依頼があった時、身体が震える程の驚き（長男が生れた時以来）を覚えました。その後、後悔と不安の念が続々と押し寄せ、やっとその思いを克服できた頃、ドサリと重い荷物が届きました。

二月二十六日。一六三名、計四八九〇句の熱気溢れる原稿の束でした。しばらくその重みから遠去かり、やっとその原稿に手をつけ始めたのが原稿〆切十五日程前でした。

四八九〇句の原稿は読み通すだけでヘトヘトになりましたが、それは心地よい疲れでした。以下は私の第一回目の報告です。

特選 玉木柳子作品（郡山市）

一読した時から、これは一位の作品だという思いが強かったが、再読しても変わらない。全句粒が揃っていてスキがない。そして重量

感がある。

・生年月日だけを残して消えた川
一本杉に哀しい戸籍が吊ってある
掲出の二句はベースが漂っているが全体として骨太の、線の頸い作者だと思う。ユーモア、諷刺、詩情が可不足なく詰め込まれていて破綻のない作語を構築していた。総合力で勝っている作者だ。

秀逸① 岩崎眞里子作品（黒石市）

第一席に少しも劣らない作品。新鮮さ、詩味の点では、一段上だと思つ。
今回の Z 賞作品ではタイトルをつけた作品はほんの少数だったが、この岩崎作品はタイトル、句の構成力、一字空け、語彙、どれを取ってもセンスを感じられた。句集も持ち活躍している作家だが今後益々楽しみな詩人である。

・母も娘も蒼を育てる月の裏

ある選後感

いかに新鮮さが必要だからと言って、ただ単に奇をてらつての表現で、どつだ、どつだと迫られても感動は起きはしない。独想は大切なことであるが、それ以上に大切なのは作品としての心であると思つている。今回の応募作品はその作品のころを通して川柳文学の神髄を創り上げようとする意欲作の少なかつた事を残念に思つている。

吉田 浪さんは読ませる作品を創る、いわゆるつまみ作家だと思つ。それが言葉に対する感性の鋭さから来ているので読者を退屈させることなく収斂の道へ誘つたのだと思つ。

荻原さんの作品には随所に屈折した感情のきわめて深い一点を指すものがあり、興味を高められた。この作家は作品の表面には人間存在の生々しさを露出しないので、結論を急ぐ荒れた眼の川柳作家には不満を与えるかも知れない。

渡辺和尾氏は第八回の応募作品が最も印象

片柳哲郎

に残るものであった。今回作品は意識しての構成か下七字の作品が多数、緊迫感や寛和していた。しかし乾いた意志の抒情が全編を通し、渡辺和尾の画かれた世界を展開していた。氏は作品の中で戯ぶことを試みられたよう、ある種のゆとりを感じられた。

樋口さんの作品は汚染されていない、と言つ感慨が強く残つた。つまり無垢な作品のもつ魅力である。日常周辺記を、それが詩歌になるなどと思わないことを、淡々と共鳴を伴う作品にして背を向ける。面白いと思つ。

柿木英一氏は骨格のある新しい心象を、それも普遍性を考慮して成されている。僕の見た秀作は9句であつて秀逸ヘランクしたい作品構成であつた。ただ削除して欲しい数句の存在が強く、佳作の一席とした。荒れた眼を挙げない作意に共感する。

広瀬ちえみさんは、軽く流して智慧の木の実を落してゆく作家のようで面白い。それだ

・哭きそめる大火を内に抱く裸木

秀逸② 荻原久美子作品（東京都）

昨年の暮、句集を出したばかりで、又その句集について色々と言われている作者だが、妙に気になる作家である。

俳句的、旧仮名遣い、ペダンティック、言葉が借り物、等々の批判があるが彼女は充分にそれらに対抗してやってゆける芯の強い女性だと思つ。句の背後には以外に古風な日本女性が竹んでいる。一行詩として彼女を評価したい。

・逢ふことの蜜の冥さを思ひをり

秀逸③ 檜崎進弘作品（神戸市）

この作者を上位に推すには異論を持たれる方があつたと思つが私はとても高く買つている。非常にナイーブでやわらかい詩精神を持つた作者である。ほのぼのとした詩情とあたたかさがある。この持味は川柳に貴重である。

・手にとつてみれば涙のごときもの

・病床にあれば半島の形している

選外になつたが注目した作者を――。

西秋忠兵衛 松村育子、田代時子、坂東乃理子、保田二郎、三鍋ゆうこ、松田京美。

けに二、三の失敗作が強烈に響くのである。感受性の鋭い、つまみ作家の一人であらう。

岩崎眞里子さんの「遠花火」は連作に構成した異色作であつた。大変力感があつて良いのだが、随所に呼吸を乱す指定休止が大事な序破急々のリズムを狂わせ惜しいと思つた。

※ ※

ひとさまの拍手の中を父の逆立ち 河瀬方子
生きるとは鮮血吹き出る誤字脱字 岩崎雪洲
人の計のひとつやふたつ冬かげろう

尾田左桐子

月光や零れるものはみなこぼし 石田 寿子

木もれ陽をひらりひらりと聖舞う 川路泰山

少年よ枯野に母は探せたか 玉木 柳子

生涯を曝しつづける髪の数 辻村みつ子

舞台は回るきらつと光る恩返し 上高みゑ子

ききぢぎの膝寄せ合はば駅になる 西川けんじ

子は眠る夜の帆船夜の水槽 檜崎 進弘

水を飲みまた水をのむ木の老人 朝倉 福

花散らす溺れた海の広さほど 吉田 州花

四、五匹の男を呑めり冬の壺 都築 裕孝

言葉へゆきつくまでを竹の蛇 松本 百子

どこまでも記憶は青し草の冠 唯野奈保美

朝焼けを集めて母を葬らん 立原みさと

薄れた個性の中の個性

橘 高 薫 風

Z賞の応募者も数が増えたことから、賞に入れた作品にすら、短詩文芸川柳として不用意な用語をなされているが目立った。

後藤止子 一連の作に、あえかなものを多分に感じられた。テクニクを押し込んでいるのではなく、けれんのない人柄による。

淋しさがレモンの黄まで辿り着く

表紙絵の小さい窓が開いている

佐藤岳俊 風土を詠んだ作品には沈んだ落ち着きがあった。凍み大根に象徴される土の味に農政への風刺があった。

この石も鏝になれる顔がある

大嘗祭へまっすぐ投げる米つぶで

坂東乃理子 大きいことを題材にしても、些細なことに触れても、この作者にはユーモアがある。時代のズレで感性の相違はあるが楢元紋太の余裕を感じてしまふ。

ペンギンが飛び込みそうで飛び込まぬ風船をもらってからの気さく方よ

梅崎流青 一句の力というものは、応募作品の中でも突出している。てにをはをはじめ、言葉の不用意な使用が見当らぬ。

焚火跡人の手足を燃え残る

風花や母に告げてはならぬこと

大橋政良 私と同年輩らしい作者だが、作品に二種の断層があるのは、羨ましい思いのする一方、どっちつかずになる心配もする。

経文の中にもあった火の匂い

手を洗ったびに違った色が出る

高橋かづき 私の先入感かも知れないが、この作者、妖精のように思えてならない。

自告しわたしの吐いた息を吸う

空想するこばみじんが割れる君

荻原久美子 この作者は、藤、牡丹、紫苑、薔薇などさまざまの花に遊ぶ。

淋しさに午前と午後のありにけり

などと、事もなげに詠まれると、それだけでうなってしまう。

嫉妬するもの

森 中 恵美子

彼岸のあとさきをつづいてよく降った。この時期十日間に雨が八日、それ以上ではないか。菜種梅雨とも、木の芽おこしの雨ともいわれるが春の選抜高校野球に雨の影響は大きく勝負を左右している。

第十回を数えるZ賞も、今年で三回目の選考になる。ひとつの流れがはっきり見えたような、その流れに沿えぬような、春の天候にも似た不安定な心境で見る一六三名の作品には脅威を感じてしまふ。

正直のところ、選考の時期が来ると大変な負担になる。木の芽おこしの雨ではないが、十日間に八日降るところではない。十日間を十五日、二十日にして作品に向きあわねばならぬ。その結果を完壁であるという自信もない。ひたすら自己嫌悪に落ち込むばかりである。心理的に川柳を疑い深くなるのもこの時期のよつだ。

どうしても三十句の作品を一組とする作家

を対照にしなければならぬのか、十句ぐらいに凝縮した対照でもよいのではないか。三十句は個々の喋りすぎにならないだろうか。

しかし、これだけの作家に出会うことは、この場所しかないのだ。二十代の持つ奔放さから、熟練された超ベテランまで確かな自己表現を持つ作品に埋没しながら、選考の可能性を試しつづけて来たようにも思う。

作品にふれず、選考方法に拘りすぎるのも苦しみの果てか。

全国的にも大きく期待される賞であるだけに、多くの問題を抱えねばならぬだろう。

川柳界に、賞というものが多すぎはしないか。北から南までZ賞をふくめてどれほどの数になるか、その実態はさまざまのようではあるが考えさせられている。

朝日新聞・天声人語にみた、最近のことは「が痛烈であった。」

愛染の闇そこにある白牡丹

広瀬ちえみ 句の余韻・余情は、鑑賞者に如何ほどの深さまで鑑賞の余地を残しているかに決まる。一読明快での佳句も多いが、二

(再) 読三読明快の味もまた深いものである。

笑い声致死量が量られている

十本目の指も齧ってしまいいけり

佳句

無罪礎それは放屁の音である 一星

偏差値へ登山電車がひっきりなし 忠兵衛

大根をみじん切りする迷いかな こうこ

石の言つままに運んでここに置く 裕見子

春の雪ときどき人の名を忘れ 寿美子

日が暮れて縄でしかない縄電車 映水

絶句する人に近頃出合わない 素蛙

私の行きたい方へ曲る道 充代

全身を使って象が起き上る 政二

端然とテレビの前に惚け座る 五月

サーカスの天幕たたむ恋のあと 多加延

逢うたびに深くなるのは簿の目 狂虎

朝顔がひとつ開いた仏さま みる子

漁火の遠く近くと抱かるる身 左桐子

寸劇の終りどちらが妻ですか 智慧

透明になるまで祈りつづけよう 朱夏

▼文学賞の多さを論じて評論家の谷沢水一さん「富貴榮爵は、すべて人の世になくしてはならぬものである、と伊藤仁斎が訓している。いつの時代でも人びとは、誰かを選びだしては持ちあげて、心を込めて賞めそやし、同時に、心をこめて嫉妬する……」

歴大な選外作品の中から選出した、一句のもつ力を信じたものである。

両耳がさらわれをつで立ち下がる 樋口由紀子

哀しくていつも後記を書いて来た 万 迷多

うっすらと闇が溜まっていく筆筒 橋崎充代

菜の花漬がきれいな情死は先送り 情野 千里

一年も唾っていないのに気が付く 福原 快作

4Bも赤鉛筆も自立せよ 本多 洋子

深い海だな学歴の記入欄 三鍋ゆうこ

夕月や人にはひとの屋根があり 吉田三千子

サヨナラをきちんと言えるのはサクラ伊東マコ

日が暮れて縄でしかない縄電車 板橋 映水

雨宿りきつと誰かを好きになる 富谷 英雄

かさぐるまひとつは泣いてひとつ咲く

岩崎眞里子

下駄箱をあけると哀につきあたる 進藤すぎの

少年の歩巾で歩く父の靴 立原みさと

ポストにも数え切れない疵がある 田中輝子

「魍 魅 魍 魎」

寺尾俊平

魍魅魍魎ということばがある。魍魅も魍魎もおおげのことだそうである。山林の精気から生じる怪物であるとか、水の精だともいよく人を化かすという。私はこのチミモウリヨウが大好きである。私がそのような感じのするものを多分に持っているからであらう。

第十回のZ賞の選を終了した。結果は別記の通りである。

選をしているとき、例年と同じように肝臓の底のあたりが痛くなるような奇妙な感じにさいなまれて困った。たくさんの応募作品の作家たちの叫びを敢えて無視して、十何名かの作家に絞ることに、ためらいのような、慙愧のような気がどうしても湧いてくるからであらう。くり返して散らして拾って作品と格闘を重ねたのも例年の通りであった。そうした経過の中で、川柳という作品の流れも少しずつ混沌の度合いを深めていくこと

をまさまきと思いらされた。私などはことばによる伝達を必然のごとく考えていたのであるけれども、その文芸としてのことばとは別なものとして、ことばとことばの関係の中の状況を表現するという、いわば空白の部分を持つ作品も多くなってきたことである。いわば川柳作家の諸君全体も魍魅であり、魍魎ではないかという気にさせる作品の群れであった。

特選の辻村みつ子作品は、ある一種の感動で再読三読の結果推選した。弱視である彼女のかそかな視界からのおもいはみごとというほかはない。

秀逸の佐藤岳俊、吉田浪、渡辺和尾は強情なまでの個性がうかがわれる。

佳作十氏の選出は難澁を極めた。のたうちまわるような確認、再確認の経過の中から抽出した。私の極めて個人的な見解を申しあげ

新鮮な現代把握

田口麦彦

ベテランも頑張っているが、若い作家がよく伸びてきたというのが第一印象である。

育たないと思っていた二十代、三十代作家の新鮮な現代把握にふれて川柳は二十一世紀の文芸の王者たり得るのではないかという予感が現実味を帯びてきた。

それだけに芥川賞的に選ぶか直木賞的に選ぶかというハムレットの悩みもつきまとうわけである。十人の選者の総合点ということになると当然出てくる顔ぶれは予想される。

Z賞の目的を問うことにもなるが、私は芥川賞的視点で選んだ。ひとつの世界を作り上げた作家はZ賞などに選ばれずとも直接世の中に打って出る道があるからである。

特選 小林こうこ

深く腰掛けてことわれない話

肝心なところでものが言えてない

お辞儀もボールペンも出にくくなった

川柳に腰掛ける姿勢を問う作品がある。

ことばに寄りかからない分パワーが出る。

秀逸 佐藤 岳俊

凍み大根ゆっくり囁んで春を待つ

ピカピカの農機で男つぶされる

枝肉にされる千牛の瞳をみつめ

何よりも底流にある批判精神を評価する。

秀逸 渡辺 和尾

北を見て歯痒きものに雪たるま

もどかしく敷石続く街は保守的

類染めて未来語れよぼくの重心

成功作よりも失敗作が多いかも知れない。

新しい世界に挑戦する過程をみた。

秀逸 吉田 柳

花吹雪われも景色もなきたおせ

一步引くつもりが半歩前にいる

うつされた風邪も一緒にいた証

応募作家中で最年少の二十三歳。若いから選んだのではない。現代把握の新鮮さである。

るならば、山本忠次郎、菊地俊太郎両君の不細工な作品の中のおもいが好きなのであるが、今年には散漫で残念至極である。

その他の佳吟

たましいの青霞がある霧の中 菊地俊太郎

モノクロの少年に会う午後 宮本めぐみ

ペリカンの顎を笑えぬ僕らの欲 奥山 晴生

衿裏を灯す波紋を螢とも 萩原久美子

私の行きたい方へ曲る道 榎崎 充代

わたくしに責任がある片思い 高橋かづき

人形の首ぐらついて雨期に入る 梅崎 流青

一番最後にやってきたのが 雨 高田 政旗

萍のころもようと思し召せ 松本 百子

折紙の最初が少しずれている 徳永 政二

人妻として横たわる秋の底 倉本 朝世

速達で来たのは俄雨だった 山本 乱

痛がゆいゆらぎのときを花氷 普川 素床

耻に歳月があるそは枕 上島もゑ子

残り香の重なるように影と影 小泉 初音

真つ青な危ない空があるばかり 広瀬ちえみ

密約の小石ひとつに流される 吉田 州花

単細胞なのだのだと風の中 山本 磔

前略もなく網膜は猛吹雪 湊 繁治

螢火は消え眼鏡屋を覗きけり 芳賀 弥市

何度も読みかえした選外の佳吟。

僕がうつった防犯カメラ見てみたい

久保 和友

今より明日が大事な男はいりません

唯野奈保美

騒がしいのは抽斗の中だけだ 山本 乱

紙と鉛筆おまえ何処まで逃げられる 桐越 千絵

バナナが熟れるバナナが腐るお申い 情野 千里

納得はいかぬが富める国にいる 森田 文

焼香の十秒間の別れかな 矢島玖美子

アイステイーを一杯 海よ グッドラック

喉仏融けぬ氷が一つある 大窪 純子

カゼをまたひく平和すぎるのだから 柴崎 昭雄

振り下ろす太刀の真下に微動せず 岡崎 徹平

セロリ囁む速度で人を好きになる 矢川浩子

志すことあり今は爪を切る 立原みさと

わたくしを忘れていない請求書 佐藤 明子

伐採が終わった山をじっと見る 高橋かづき

P KO形見の時計よく狂っ 榎崎 充代

稲垣 冬民

選を終えて

短歌や俳句の世界でも、作家の平均年齢と
いうことがよく話題になるが、川柳界ではど
うなっているのか、いまや全国的規模で現代
作品の土質な領域が俯瞰できるZ賞の作家年
代に、今回はこだわってみた。おそらくそれ
が、現在の川柳界を象徴するひとつの真実を
提供するものと信じたからだ。

年齢記入のない六名を除く全参加者（一五
七名）の平均年齢は五五・一歳。世代別では
六〇代の四七名（二八・八%）がトップで、
次いで五〇代の四三名（二六・三%）、以
下四〇代三一名（一九・〇%）、三〇代と七
〇代が同数の一五名（九・二%）と山なりに
減少、下限の二〇代は三名（二・五%）、上
限の八〇代は二名（一・二%）と、これは極
端に数字が低い。
年代の刻みを五年ずつずらせてみると、五
〇代後半〜六〇代前半が四九名でいちばん多
く、平均年齢の基盤をなしている。
私が採った第一次の六四名は平均が五四・
八歳、第二次で一八名に絞ったところ五七・

尾藤三柳

四歳にはね上がったが、最後に残った一五名
（この中に不明が四名もあるのは残念だが）
では、五五・七歳で、全平均に限りなく近づ
いたのは、偶然とは思えない。多分、現在の
川柳界でいちばん脂の乗り切った世代は、五
〇代半ばをやや過ぎたあたりということでも
あろうか。

さて、特選に推した加藤久子さんは、この
平均より少し若い五〇代前半。女としての精
神遍歴に不足のない年齢だが、彼女の世界は
必ずしも多彩ではない。パレットには数少な
い色しか置かれていない。が、どこにでもあ
るバス停や工事現場、テプルの上の果実や
日なたの猫といった平凡な風景が、ひとたび
彼女の目を通すと、見たこともない夢の風景
のように、それでいて深い鼓動を伴って再現
される。心象を通して再構成されるこの風景
は、しかも不思議な現実感とディテールの鮮
明さを持つ。「写実」とは真にこのことであ
ろう、と私には思われる。
秀逸の三氏は、それぞれの個性とテクニッ

クの高さを指摘せねばなるまい。流行の感傷
過剰や思わせぶりがなくとも、一個の人間
としてのアイデンティティと、作家としての
自意識が揺るぎないことを示している。
佳作は十一点を残したが、その内容につい
ては必ずしも満足していない。現実から眼を
背けた思い入れや、浅い見切りを技巧でくる
めた目くらまし、塗装を替えただけのステレ
オタイプなどが目につき、全体の九・二
%に過ぎない上位に選んではみたものの、な
お釈然としないものが残ったことを敢て付言
しておきたい。

なお、最後に三点だけ落とした作者には私
自身の未練もこめて、以下に作品を掲げてお
く。
京都市 上島みゑ子
冬の屋根静かなわけが置いてある
死のはなし春のスーツを買っはなし
大牟田市 山本 乱
ふところの波を男に見せにゆく
心をこめて男の骨を囁んでいる
東京都 荻原久美子
マラルメの靴音を恋ふ枕木よ
三千足の靴下やがて蛇いちぢ

てのひらを開くと秘密消えている
めがねトンネルからふらふらと縋馬
枯れひろがる鍵穴も鍵も眠り
白い天国風鈴だけが鳴っている
時計も欠伸している何もない小半日
素直に平和に茶畑が茶いろ
呆ける楽しさ帽子が水に浮いている
秤の上で口笛を吹く今日から定年
老後ってこんなものか二杯目のミルクティー

佳作 市川市 普川 素床

エプロンをつけてやる気になっている
棘のない女となつてごほん炊く
うそついてから本当にする努力
愛情は証拠せまられやすきもの
くちづけに私の中の桜咲く
寒の水美人になれる気がします
べっぴんと言われてさらに厚化粧
夜に書く手紙くだらぬこと多し
しまい湯の柔らかき湯で身を洗つ

佳作 品川区 高橋佐知子

渚夕景 ぼんやり見えて来た彼岸
萩野の萩となりゆく母を見送って
青磁澄む母も私も影のなか
西へ西へと人らが歩くはるかな街
闇夜降られておんなの喉を刺す水藻
野の仏我がふところに寒かりき
夜の羽音 風より重い同胞や
首あおく月下をくぐる病み仏
天の権 花野に揺れる母がいて

佳作 国分寺町 板東 弘子

耳を伝って悲しみが落ちて行く
誰よりも低いところで祈っている
悼みから悼みへ飛ばす紙の鶴
十五夜お月さん愛しいものを掌に咲かす
花影に遥かなものを埋めに行く
さくら満開こいびととする死のはなし
狐火が誘うあやうい時間帯
含み笑いをはじめる夜の桜の木
無心ではいらなくなる花雪吹く

佳作 大木町 松永 千秋

月の家 故郷を離れてゆく日なり
一月を過ぎゆく頭上から人ら
「地球は蒼し」と樹の下は冬、誰も冬
無医村のさて河豚鍋のありはあり
樹にのぼる姉ふらんすをてのひらに
雪の樹をゆらり雪崩も身の証
瘦身や樹に臥すとめどなく木笛
雪の華を喰わん如月 鳥にならん
肺を被う青光駆ける一夜とし

佳作 高松市 大谷晋一郎

ふところの波を男に見せにゆく
フライパンの上で男よ踊ろうか
速達で来たのは俄雨だった
くす籠を多感にさせてばかりいる
切り取った男の影絵あそびかな
銃口を向け合っている熱帯夜
置一枚あれば烈しくちりぬるを
もっともつとと覗いてしまう壺の中
おそろしくなるまで視つめ合っている

佳作 大牟田市 山本 乱

佳作 大津市 峯 裕見子

帰したくない娘と雨の終電車
音もなく死んだ家来を知っている
男ありかすれた線を今日も引く
罰として私を好きと言いなさい
空色のピースをつなぐ待ちぼうけ
寒いのは母が遠くへ行ったから
骨格が似て声も似て父を越え
ご希望の曲で踊ってみせますよ
芥子たっぷり効かせ男を待っている

佳作 守山市 徳永 政二

折紙の最初が少しずれている
人間を抱きしめている土の笛
純情に油まみれの彼がいる
父帰る隣の犬が吠えている
しゃぼん玉別れることのうまかりし
手を握る寒いところを生きてきた
少年の池は埋立てられました
指の骨まがる程まで働いて
さみしさを書こうかこうとする右手

佳作 大東市 柿木 英一

異端者が目覚める夜の飛行船
抛物線の沈むあたりに桃熟れて
逆説のパン種を売る似非基督
千匹の蝶舞う水浸しのデルタ
傾きながら光る精神科の椅子よ
煉瓦の家に黒い舞踏の部屋がある
後の世にひらく十指やさくら感覚
何処からか翁来て指す海の火柱
薔薇咲いて人体模範微熱する

佳作 西宮市 高橋かづき

桃よりも傷つきやすくなっている
わたくしを忘れていない請求書
欲しいもの五月の朝の飛行雲
あぶなくて目が離せないわたしから
うっとりとするまでわたくしを責める
白ぼたんほろほろ忘れられていく
六月の文はたて書き簡潔に
わたくしがねむっていても枇杷熟れる
他愛もないはなし駄まで来てしまっ

佳作 宮古市 万 迷多

そんな不吉な音で新聞をめくるな
この雲と生きて行きたい縄を縛う
優しさへ若しやもしやと橋渡る
血の濃さのこけつ転びつ川一筋
紙ヒコーキを飛ばしつづけている詩人
天啓の絵に音もなく雪が積む
笠ひとつ被ることだな老いるって
神を恐れないでホット・ウイスキー
ぬくもりを捜して冬の井戸を掘る

佳作 砂川市 大橋 政良

ゼロというヒントが皿の上にある
直視から逃れ汚れた靴を見る
空缶を蹴ると昨日の音がある
自画像を整形したら淫らかな
ジャガ芋の芽が活けてある散文詩
手袋を脱ぐどの指もテロリスト
父の背にキリトリ線が揺れている
疵口がときどきうずく紙ナイフ
蝙蝠を一匹飼っているおんな

佳作 京都市 奥山 晴生

人の上に入居て柿もたわわに
切り取り線の外にもあすはある筈だ
介錯してあげたのは罪ですか
菜の花の真ん中に居て飢えている
鬼も仏もにっこりさせる乳房です
ペリカンの頸を笑えぬ僕らの欲
夕焼けを担いで行った風船屋
玉手箱以後を人間だと思っ
胸に棲む鷹の哀しい眼を見たか

佳作 野辺地町 柴崎 昭雄

血を浴びて雪がぬくもり帯びてくる
生きるもの死ぬもの掬う箸を買う
しゃぼん玉ひとつ壊してひとりの鬼
手負いの鴉 傷口は真っ赤です
海鳴りが止まぬ人魚の溺死体
太陽を砕こうとする無精髭
ピーマンを振ると聞こえる父の声
病んでいる背骨横たう冬銀河
麻痺の掌が風をつかむと抜ける闇

佳作 山形市 伊東 マコ

陽たまりを予約しておく 首ふたつ
生首がときどき重くなる日暮れ
なんとなくいたわり出した 首ふたつ
人間らしく 花の柩におさまろう
笑えないコントも入れてやる柩
一本のあばら骨をさがしているアダム
骨つぼの中で笑いが止まらない
女ですもの 骨つぼは赤と決めました
骨つぼの中 耳すます みぎひだり

佳作 神戸市 稲葉早恵子

静寂の中で聞こえる音探す
客船は悲しみ乗せて黙り込む
目を閉じて映る景色に未だ会えず
恋してしまふサーカスの少年に
聞きたくて怒らせてみる夫の声
ふと視線誰かがそこにいるような
空腹の子猫の如く待っている
小豆炊く愛してくれる男がいる
彼の目に私が映る紅い薔薇

佳作 秋田市 加賀屋美津子

目がはれるまでは泣けない社会人
一人寝の布団朝には暖かい
退屈な会議にネクタイ見比べる
一夜きりの夢は枕に置いてゆき
サンガラス大人のいないいないばあ
三者残尊うまくいかない恋ばかり
はみ出した足を無数の人が踏み
咲くまでは居所知らせぬ芝桜
アルバムには笑顔の私しかない

佳作 京都市 山本 礫

単細胞なのだのだと風の中
封印をしよう かなしい耳なのだ
人間に掌があり 訣れがくる
お幸せですか 軽音楽のように
今日もまた ポストへ入りたくなった
傘一本あれば飄々となれる
河口まで パラの形で流れよう
シャボン玉よさよならがまたふえました
すこし怯んで男の貌を作るのか

佳作 松原市 本多 洋子

花びらを心に浮かべ逢いに行く
宴の後のてのひら花の種子三つ
吉祥天もおてもやんも丸あるい耳
風は優雅に飛天の足をすり抜ける
屈折した友を五月の野に誘う
水際でほどくりボンの一部始終
あじさい見ごろ風が拾った女文字
風紋に置く父の日の父の帽子
ひと夏のドラマが透ける花のハンカチ

佳作 土佐市 立原みさと

水晶の羽きらきらと五月の子
少年は五月の川を溯る
セロリ噛む速度で人を好きになる
まっすぐな視線が放つ四分音符
六月のレモンは答え待っている
さよならは葡萄のように呑み込もう
少年の渴きを宇宙に解き放つ
少年の微熱が続く森の中
レモン一個持て余しては青春がゆく

佳作 気仙沼市 奥田 一星

美顔術神の掟を知らないな
負けたなと思つ ライバルの助言
反主流浮き輪を投げる人がない
法網が掬っているのは雑魚ばかり
夕陽ストーンと繩のれんに入る
団体さんお着き目鼻を取り替える
レクイエム森はだんだん眠くなる
難聴のヒト科 聞こえぬ森の呪咀
私との戦いダイエットに負ける

佳作 大宮市 佐藤 美文

待っている長さで蛇が計られる
反論の火をゆっくりと噛み砕く
てのひらで狡い仏になりすます
万歩計古い絵皿を歩き出す
建て前という逃げ道で鬼に逢う
日めくりの厚さも鬼の修辞法
反論の辞書は重たいほうがいい
正論という真四角な落し穴
幾重にも鏡に写す自己嫌悪

佳作 宇治市 岡崎 徹平

犬の鼻なながそんなに悲しいか
眠らねば蜘蛛が巣を張る秋枕
火の噂水の噂を撒く時計
オンザロックをすこしためらう遠花火
カゼをまたひく平和すぎるのだから
雑談にぬくもりがある著の位置
赤い糸の果てをしがらみだというか
戦争を憎む一粒ずつのめし
飽食の刑が犬にもわたしたしも

佳作 熊本市 松田 京美

ビュービューと風吹きあれている原点
いずからいずこへ父をさらってしまつ冬
喧々囂々わたしの川の水源地
十八の冬に両親切り捨てる
父も許さず母も許さず泣き叫べ
蠶繭の限り父親自慢する真夏
否定の限り父をまっ殺する真冬
生々流転父を求める辞書を作る
いまさら偲ぶことを許さぬ頭蓋骨

佳作 臼杵市 板井真知子

猫に飼われて一夏を飢えている
人の名を覚えられない癖があり
傘さしてもぬれる背中の誕生日
語られぬ夢のかたちに母眠る
心疲れてきらめきだけの街を見る
トマト熟れなすこともなく日曜日
話し疲れて鰐を見ている女二人
金星近く幸せに許されている
橋渡り終わった先の真っ暗がり

佳作 釧路市 網野 悦香

管幾条吊られて生きていた命
北国の女は長い冬を編む
半身でもまだ泳ぎたい蛙である
かげろうの手足呪縛の解けぬまま
病褥の衾布も凍る寒の朝
凍死したままで干されている軍手
厳北や油焚く木を焚く石を焚く
父祖の血と汗染みこんだ朝北の地
親を捨て子を捨て妻を捨てひとり

佳作 名古屋市 吉田三千子

ひとの匂いに目を伏せた冬の魚
甘い骨を砕き午後後の皿には白雲
いつも雨 眠ると落下してくる霧
耳からの音符 白い眠りは広が
ましていま眠っている水の位置
恋歌のピアノ 闇に花びら散りぬ
むかしの私いまの私 おままこと
やはらかな宇宙規模での恋愛専科
豆腐切る半月の真下の部屋も光り

佳作 和歌山市 神平 狂虎

内からの雨を避けんと身を振る
叶うまで滝に打たせておく拳
爪を剪る 西陽は肩で避けながら
秋と肩並べ自分の中歩く
本は港でポンポン船の音がする
霜柱さくさくさく風の恋
瞳の奥にある残雪を光らせて
念と書く 氷のかけらなど噛んで
約束の時間た水に還ろうか

佳作 札幌市 加藤かずこ

覚めた眼が落ちる 校門前の道
ジャックと豆の木が消えた学園
掌の中へ沈めた小鳥騒ぎ出す
真っ白い皿からトマト暴走する
鬼の音符へ転がる小猫たち
夢売りの足を握える目のない魚
雪の運河にある私のオモチャ箱
鳥獣戯画のなか売れる野いちごよ
疑うて食卓すこし歪み出す

佳作 高浜市 加藤 正治

過労死へお見舞にくる酸性雨
謀報が聞こえすぎたと耳を削ぐ
鮮明を越えてしまった冬の塔
葬儀屋が舐めた鉛筆置き忘れ
いつまでも波を見ている毒になる
哲学を前面に出す縛につく
ずぶ濡れで妻の楽器は背を向ける
嘘つきも丁寧に読む時刻表
狂う日も雨は天から降ってくる

佳作 札幌市 高田 政旗

生きてゐる音を心臓から貰う
台風接近 自己紹介を願います
いのちははらはら樹のてっぺんの日差しかな
胃の底を歩くありふれた日めくり
地下鉄沿線族 鳥になれない
火を撫むどの指も仕事人間
男の悲鳴ぐるぐる回る時計
突然に深夜手当が眠くなる
手に掲げし五臓六腑もありぬべし

佳作 松江市 竹内寿美子

人を待つ肩から春が暮れてゆく
春の雪ときどき人の名を忘れ
スランプをまだ抜け出せぬ水すまし
校庭のポプラをいつも見て通る
ブランコに二人で乗って尚淋し
他人事の恋の話を聞いている
あの日から鳴らなくなったオルゴール
目的はないけど旅に出てみよう
善人になろうと涙をつく

佳作 金谷町 川路 泰山

二月月の風細りゆく父の忌ぞ
父の忌へ落花落暉の酒買いに
尾花ゆれ亡父なを遠く薄暮れし
ひたひたと翌なき戦 野火走走
獸心や罪なき翼ひきさきて
妙法の崩れて久し人影ぞ
こんこんと水湧く影ぞ浄心ぞ
木もれ陽をひらりひらりと聖舞つ
何もかもかなぐり捨てる炎天よ

佳作 福岡町 長井すみ子

思惟の扉を叩く今夜のお月さま
折鶴を放そう冬の自画像に
鏡から零れていった碧き影たち
階段を登るしっぽが邪魔になる
それはノンフィクションで豆の木を枯らす
獅子おとしコトリ 喉仏の行方
野仏が泣き虫だから引き返す
じゃんけんばん誰かが鬼になるこの世
チーズケーキの芯にいのちの微濁音

佳作 広島市 唯野奈保美

月かげに濡れてそろりと訪い来ませ
渡れない橋です 夢にても緋色
そのあとはそれからのこと足袋はだし
何処の野を越え来し人か 草いきれ
すぐに火がつく左は淋しがりの乳房
たわむれに苦き火酒なぞ干すものか
どうしてもあなたがほしい花いちもんめ
骨までも美しい手で殺めてよ
十重 二十重契りて查かさくら闇

佳作 仙台市 板橋 映水

A型の水は口うつしでもらつ
ああ夫婦 ふくら飯が炊きあがる
牡蛎食めば口にひろがる黙示録
河はただ流れる魚の背は曲がる
一点を凝視はとけに近くなる
梅干の種に家訓がまた残る
米櫃の底から掬う無言劇
つめたけり羊歯植物の姉の手は
たぶらかす木の葉をもっと集めねば

佳作 和歌山市 辻 スミ

表面張力いまわたくしが試される
水飲んで白自すること何もなし
冬のこぬ間に溢れるものはみな捨てる
哀しみの底でポキッと骨の音
ステンドグラスにわたしの罪を沈めよう
聴えませるか聴えませずバツハの受難曲
山は高くペンテコステを待ち望む
透明になるまで鐘は鳴りやまず
掌中に川が流れるひとりぼち

佳作 熊本市 末村 道子

ブランコの向うで時が過ぎてゆく
わたしひとりの想い出がある吾赤紅
むかしむかしの着物華やぐ授賞式
また冬野さまよっている夫婦鶴
ゆっくりと想いを溶かす角砂糖
ちぐはぐな一生でした凡夫婦
さくらさくら私にいい日また来ない
きつと咲くと信じて植える移植こて
春が来たわたしも走り出しましょう

佳作 名古屋市 西尾 典祐

元日の新聞が説く無駄遣い
はねつきをするは磯野家だけとなり
新春の気疲れさそう妻の里
記憶力七章がゆで勝負する
年ごとにロシアの冬は寒さ増し
我身には鬼は来ないが福も来ぬ
温暖化認めたくなる冬の朝
長風邪がなおったとたんに花粉症
地球儀の製作所には暇はなし

佳作 仙台市 宮本めぐみ

終身刑か わたしの椅子が変わらない
半眼で見つづけている冬花花
花冷えや中耳に溜る弦楽器
いくたびの風を享けしか両乳房
冬ガラス傷の深さを浮き彫りに
薬人形 打つ手を今日も考える
花野の溝を往ったり来たりする私
乱の日の窓は一気に開け放つ
落雷で死にたくはない茄子の帯

五月の雨に

加藤 久子

ここ二・三年、はじめて味わう川柳の
苦しい坂の途中で、大きな賞を戴けるこ
とになりました。これも何か意味のある
ことと、嬉しく有難く思います。
五月の雨の午後に賞のお知らせを頂い
てから、それまで胸を張って前を向いて
いた三十句が、急に心細そうに「親」を
振りむきます。「だいじょうぶだよ」と
いいながら、これからの重さを考えると
足が竦みます。

川柳をはじめて十年と少し、Z賞応募
は多分、回目から、一年間の作句を振り
返れば、貧しさを思い知らされて愕然と
することが多く、それでも、自分の世界
が少しずつ見えてくる楽しさに、続けて
きたZ賞応募でした。「かもしか」の豊
かな海で泳がせて頂きましたことを感謝
いたします。こんなにも深く拘ったのが、
俳句でもなく、詩でもなく、何故川柳な
のか、答を探しながら、またここから一
歩踏み出すことにします。本当にありが
とございました。